
幻の語り――婉

知秋一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の語りー婉

【Nコード】

N9597B

【作者名】

知秋一葉

【あらすじ】

夢を尋ねる旅！十八年前のこと…

婉（第四話）

「婉」

風は本気だった。

一週間後、

風は添乗室と総務室の意見を検討して、完璧な

「家族の絆」の企画書を提出した。

同時に、休暇を取って、旅に出た。

美しい山。

バスは山麓に止まって、一人の男を降りさせた。風だった。

夕日が綺麗だった。

「山気日夕佳

（山に湧く気、日中でも夕方でもそれぞれ美しく）
飛鳥相與還

（朝出た鳥が夕方に飛び連れて山に帰って行く）

此中有真意

（その中に万象の奥の真理、自然の道理の意味を感じる）
欲辨已忘言

（語ろうとすると言葉を忘れ、真実は言葉では語れない）
「
風は陶淵明の詩を唱えて、
山道に沿って奥に入った。
久しぶりの気持ちだった！

「風！お帰り〜」

冴えた声だった！

声の主を探すと、

たおやめが迎えにきた。

師父の娘、婉だった。

あのきらきら光る瞳は十八年前と同じだった！

十八年前。

ある茅屋に、

「お父ちゃん、この子は死んじゃうの？」

同じの冴えた声だった。

「いや、大丈夫だよ」

優しい声だった。

「どこ？ここは？」

と、風は蘇えた。

あのきらきら光る目があった。

「動かないで！私、婉です」

「坊や、完全に回復するまで寝たままぼうがいいよ」

優しいおじさんだった。

それから、

三週間の日々、

婉は風に薬を飲ませた。

夏なので、

蒸し暑かった。

そして、

婉も風の体の汗を拭いた。

はじめて、

母ちゃんと姉ちゃん以外の女の子に体を見られてしまった。

風は恥ずかしかった。

その間に、

記憶も取り戻した。

遠足をした時に、

不注意で山から落ちたが、

婉のお父さんに救われたのだ。

だんだんに、

風は動けるようになってきた。

ある日、

婉は風をつれて自分の部屋に入った。

「風、これを見て」

「うわー、綺麗なガラスのボールだ！」

「違うよ。これ、私の秘宝、水晶球だよ」

「水晶球って、何をするの？食べ物？」

「人の過去と未来が見れるの！」

「法螺をふくなよ」

「本当！本当！みせてあげるよ」

婉は座って水晶球を両手でささげて持った。

「さー、風、手を水晶球の上において」

風は言った通りにした。

婉は呪文を唱え始めた。

すると、不思議な光景は現れてきた。

水晶球は自ら五彩の光を放った。

その後、

風が山から落ちた光景が水晶球に浮かんできた。

「あー、すげー！」

風は思わず叫んだ。

その瞬間、

水晶球に浮かんできた画面は消えてしまった。

さらに婉も倒れた。

汗だらけだった。

顔も青白くなった。

「婉……！」

風は婉に抱きついた。

「婉……！」

婉のお父さんは風の叫びを聞いて、
走ってきた。

「風、婉の口を開けて」

と言いながら、

秘薬を取って飲ませた。

2時間が経った。

段々に婉の呼吸は正常になって、
顔色もよくなってきた。

「風、婉はもう大丈夫そう。自分の部屋に帰っていいよ……！」

「ずっとここにいたい、おじちゃん」

「いいけど。お前まだ完全に回復してないだろう」

「僕、大丈夫だよ！ここに座って婉を見るよ」

「そうか。眠たくなったら……」

「はい」

3時間が経った。

婉は目覚めた。

「お父ちゃん！あー！風、ずっとここにいたの？！」

「ごめん、婉、もう二度とあんなことを言わないよ」

「私のことを信じたよね？！」

「うん、信じた。秘宝のことも」

「うれしい！」

「風、婉もう大丈夫よ。部屋に帰って寝ていいよ」

「わかった。婉、また見にくるよ」

「風、夕方わしの部屋においで。話があるんだ」

「お父ちゃん！風のせいじゃないよ、私…」
婉は弁解しながら、起きた。

婉のお父さんは
「わかつている。ゆっくり休みなさい」
と、婉をベッドに横にした。

夕方、

二人は長く話した。

具体的な内容は分からないだが、
悪い話ではなかったと思う。

なぜならば、

婉のお父さんは微笑んでいたし、
風も興奮していたからだ。

さらに、

食事中に、

風は婉のお父さんを

「師父」と呼んだ。

翌日、修行は始まった。

3週間後に、

師父は風を親に送っていった。

絶望していた親は、

二人を見て

言葉が出なかった。

大喜びと大変な感謝の気持ち、
言葉で表現することができなかった。

それは当然のことだろう。

暫く誠意の招待のあと、

お別れの日を迎えた。

師父と風の両親は約束をした。

学校が休み時に、

風を山に送ることだった。

理由は、

自然の生活を風に暮らせたいということだ。
勿論、

修行のことは二人の秘密だった。

そうして、

休みになると、

風は山に行って3人の自然生活をした。
修行も続いた。

前の静かな生活より、

ずいぶん賑やかになったが、

“犯罪”の発生は避けられなかった。

首謀は風、共犯者は婉だった。

三人しかいないので、

すぐばれてしまった。

犯罪行為は軽かった。

例えば、

師父のお酒を水で薄めるとか、

飼っている可愛い鹿に泥をかけるとか、

鶴の足を紐で結ぶとか、

悪戯程度の“少年犯罪”だった。

師父からの処罰を受けたことは、

当たり前だった。

「バケツで潭の水を家に運べ」

と、師父に命じられた。

しかし、

罪に服する二人が、

潭に着くと、

潭は二人の遊び場となった。

贖罪の気持ちや、

時間のことも完全に忘れてしまった。

気がついたら、

もう晩御飯の時間だった。

やばいと思ったのに、

そのまま空っぽのバケツを持って帰った。

「風、これで大丈夫かなあ?!」

と、不安な婉は聞いたが、

「大丈夫さ！僕に任せて！」

と、風は自信満々だった。

師父と会う前に、

厨房に寄って池の中の水をバケツに入れた。

その結果、

当然、師父に叱られて、

涙をぼろぼろとこぼした。

師父は弟子と娘が大好きな親馬鹿だった。

可愛そうな二人を見て、

心を鬼にすることはできなかった。

「今度したら、許さんぞ。ご飯を食べろ！」

と、許してあげた。

すると、

二人はすぐに嬉しい顔をして、

食べ始めた。

しかし、

遊び過ぎで、

途中で寝てしまった。

一方、秘術の修行は、

目覚しい進歩を遂げた。

時間が経って、
秘巻が読めてから、
風が山にくる日は、
段々に減った。

しかし、

山に来る日には、

必ず“二鍋頭”のお酒とイチゴ味のチョコレートを持ってくる。
師父と婉の好物だから。

チョコレートが融けないように、

二人は潭の近辺の山窟中に、

千年の氷を利用して冷蔵庫を作った。

「風、何を考えているの？」

と、婉の言葉は風を現在に戻した。

「いや、何も」

と、言いながらぎゅっと婉の手を握った。

「風！どうしたの」

ちよつと恥ずかしい気持ちに喜びも混ぜている声だ！

「何も！師父に会いたい！婉も！！」

婉の手を握ったまま、

風は勢い走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9597b/>

幻の語りー婉

2010年10月8日15時04分発行